

# 並列表現「～も…ば、～も…」の成立小考

京 健 治

## 1. はじめに

- (1) a 野球もすればテニスもする。  
b きれいな空もあれば澄んだ空気もある。

(用例 (1 a) (1 b) とともに『デジタル大辞泉』による)

現代語に於いて、(1) に示すように、「～も…ば、～も…」という文型を取った並列表現形式がある。こうした「～も…ば、～も…」による並列表現は、江戸時代後期頃から見られるようである (= (2) 参照)。

- (2) (e) 前件後件の二つの事態・状態を並列して示す。江戸時代後期の江戸語に見られる。

「一も一ば、一も一」などの並列表現となる。「なんでも商売に精を出して見ねへ、親もにこにこすれば、か・アも焼餅はやかずか (なんでもいいから何か商売に精を出してごらん、親もにこにこするしかかあ (妻) もやきもちやいたりしないしないものだし) (滑・浮世床・初)

(『日本語文法大辞典』「ば」の項：P635) (下線は京による)

この「～も…ば、～も…」による並列表現は、本来、条件表現に与る「已然形 (現代語では仮定形) +バ」形式からの転用であるが、それが如何にして並列用法を派生させたのかという並列用法発生の経緯についてはこれまでのところ十分な検討が為されてきたとは言えないように思う。また、「～も…ば、～も…」形式による並列用法が江戸後期頃、発生したとすれば、何故にこの頃に発生を見たのか、という時期の面に関しても検討する必要もあるように思う。そこで、本稿では、「～も…ば、～も…」による並列用法の発生の経緯について、特にその発生も元にあった条件表現との関わりを見ながら、検討を加えてみることにしたい。

## 2. 「PばQ」による並列用法概観—江戸期の用例—

(1) に掲げたように、「ば」による並列用法は「～も…ば、～も…」という形が典型的なようである<sup>(注1)</sup>が、「PばQ」構文に於いて、「～も…ば、～も…」以外の文型を取り、事

柄 [P] [Q] とが対等の関係を示していると捉えられるものが、江戸後期以前の文献からいくつか拾うことができる (= (3))。

- (3) a 白眼あれば笑うあり。 (遊子方言)  
b …甚よく思われて皆心安ければ、来るあれば帰るあり。障子越に言葉をかけるあれば、とつちりと咄す有。 (傾城買二筋道)  
c 口のかゝる妓女あればあいてかへる舞妓あり (仕懸文庫)
- (4) a 正月着る物して貰ふ若旦那もあれば、盆帷子の心當ての手代もあり (傾城禁煙氣、三巻第一)  
b 盛場の小児だとして、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうシ、寺地の者だとして、葬礼の強飯を食ふものもあらうシ、又食ふと限る事もねへネ (浮世風呂)  
c ハテ夜鷹といふものは、ばくしした婆もあれば、ひいたもれの新造子もあらアな。 (浮世床)
- (5) a なんでも商売に精出して見ねへ。親もにこすれば、かゝアも焼餅はやかずか、物前にも苦勞がうすくて、寿命が延るやうだ (浮世床)  
b 上方でも長崎でも、手めへに見かへる女もなければ、手めへの様な浮薄女もねへはな。 (春告鳥 三篇)

(3) は「AあればBあり」という文型であり、(3 a)「白眼(睨みつける者)がいる」ことと「笑う者がいる」ことが並列されている。(3 b)「来るあれば帰るあり」は「来る者がいる」ことと「帰る者がいる」ことと、(4) は「AもあればBもある」型のように「も」を挟んだものである。(4 a)「正月着る物して貰う若旦那がいる」と「盆帷子の心当の手代がいる」ことが並列されている。(4 b) は「鳴物に怯えぬ子がいる」と「鳴物に怯えない子がいる」という2つの事柄が併存することを示している。(4 c) も同様。(5 a) では「親がにこにこする」と「かかあが焼餅をやかない」こととの並列、(5 b)「手前に振り返る女が居ない」と「手前のような浮気女が居ない」こととの並列である。

「P比Q」形式において、並列的關係を示すものを概観したが、概ね、次のような文型を取っており、①→②→③→④の順に出現するという様相を呈しているといえよう。

- ①:「A(が)あればB(が)ある」型 (= (3))  
②:「AもあればBもある」型 (= (4))  
③:「Aも【「ある」以外】動詞は、Bも【「ある」以外】の動詞」型 (= (5 a))  
④:「Aもなければ、Bもない」型 (= (5 b))

### 3. 並列用法「PばQ」に於ける事態〈P〉〈Q〉の性格 — 〈現場性〉と〈非現場性〉—

ここでは、並列表現「PばQ」の成立及び展開に関する検討課題を確認しておきたい。第1節で述べたように、「ば」による並列用法の発生を考えるあたりの課題としては、条件表現としての用法から並列的關係を示す用法が如何にして行われたのかがある。本節では、まず、「PばQ」形式による並列において、如何なる事態を並列しているのかに着目しながら、当該形式の生成過程を考えて見ることにする。

- (6) a 白眼あれば笑うあり。 (遊子方言)  
 b …甚よく思われて皆心安ければ、来るあれば帰るあり。障子越に言葉をかける  
あれば、とつちりと咄す有。 (傾城買二筋道)  
 c 口のかゝる妓女あればあいてかへる舞妓あり (仕懸文庫)  
 d 正月着る物して貰ふ若旦那もあれば、盆帷子の心當ての手代もあり  
 (傾城禁短氣、三卷第一)

(6 a)「白眼 (= 「にらむ」) 者がいると、笑う者もいる」の意、(6 b)「帰るあれば来るあり」は「帰る者もいるし、来る者もいる」の意であり、(6 c)は「口のかかる妓女がいるし、飽きて帰る舞妓もいる」というように、対比的な事柄が列挙されている。さらに、注目すべきは、これらは、現前での事態を列挙しているという点でも共通している。(6 d)は現前での出来事ではないが、それまでに観察された事柄が並列されている。(6)は実現している出来事を並列しているということになる。これに対して、(7)に示したものは、話者によって想定される事態が列挙されている。

- (7) a 盛場の小児だとして、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうし、寺地の者  
 だとして、葬礼の強飯を食ふものもあらうし、又食ふと限る事もねへネ  
 (浮世風呂)  
 b なんでも商売に精出して見ねへ。親にもこゝすれば、かゝアも焼餅はやかずか、  
 物前にも苦勞がうすくて、寿命が延るやうだ (浮世床)

中俣尚己氏によれば、「ば」による並列は「モグリティ要素」は並列しない<sup>(12)</sup>と述べている (= (8) 参照)。

- (8) a \*彼は英語もできるらしければ、中国語もできるらしい。  
 b [彼は英語もできれば中国語もできる] らしい。

前掲(7 a)は[[鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあら]う]という構造であると解される (= (9))。

(9) [[鳴物に [[おびえぬもあれば] [おびえる子もあら]] う]

ここでは「鳴物におびえない子もいるしおびえる子もいる」という事態を仮想していることを示している。また、(7 b) では、「商売に精を出してご覧なさい」と提案し、そうすれば「親がにこにこする」「かかあが焼き餅を焼かない」という二つの事態が生じるであろうとする話者に仮想された事態が示されている。(7 a) (7 b) での並列表現「PばQ」形式は、話者によって仮想された事態が述べられているという点に於いて、先に見た現前の事態—実現済みの事態—を列挙する用法 (= (6)) とは、提示される場所の事態 [P] [Q] の性格に違いがあるように思う。

(10) タイプ①：実現済みの事態の並列 (= (6))

タイプ②：未実現の事態の並列 (= (7))

#### 4. 並列用法「PばQ」と条件表現との関係 (1)

条件表現用法の「ば」との関係を考えて見よう。まず、【タイプ①】とした「実現済みの事態の並列」と条件表現との関係を考えて見る。ここで【タイプ①】の例を再掲する。

(11) …甚よく思われて苦心安ければ、来るあれば帰るあり。障子越に唇葉をかけるあれば、  
とつちりと咄す有。 (傾城眞二筋道)

(11) 「来るあれば帰るあり」の前件「来るあれば」と後件「帰るあり」との間には於いて、「来る者がいるので帰る者がいる」のような確定条件から派生したとは考えにくく、ここは現前で起こった出来事の描写であることから、これは条件表現のうちの〈偶然確定用法〉からの派生であろうと思われる。

次に【タイプ②】についてであるが、こうした未実現の事態を述べる並列用法「PばQ」は、上記の〈偶然確定用法〉からの派生とは考えにくいように思われる。尤も、実現済みの事態の並列用法の継続的使用に伴い、それまでの実現済みの事態の並列に限らず、未実現の事態を並列するように、用法が拡張したと見ることも可能はあるが、〈実現済みの事態を列挙する〉ものと話者が想定する〈未実現の事態を列挙する〉ものとは、事態提示の方法に差違があるように思う。前者は、発話時に観察されるところの眼前の状況やこれまでの経験等を踏まえた事態が示されており、現場性が強いものであると捉えられる。これに対して、後者は、あくまでも話者が想定するところの事態が述べられている。

両者は「PばQ」の形を以て、二つの事態が併存することを示すが、その提示される場所の事態 [P] [Q] に着目するならば、前者は実際に見開きた事柄を並べるものであるのに対し、後者の [P] [Q] は話者自身の想定した任意に取り出した要素を列挙したもの

であると言えよう。

先に【タイプ①】については、〈偶然確定用法〉からの派生であろうと述べたが、上に述べたように、事態〔P〕〔Q〕の性格を踏まえると、【タイプ②】の発生の経緯については別に考える必要がありそうに思う。そこで次節では、この問題について考察を施すことにする。

## 5. 並列用法「PばQ」と条件表現との関係（2）

湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』（P532）に、「ば」による並列用法に関する記述がある。

【注意二】「ば」は現在の東京言葉では、「松もあれば、杉もある」「踊りもすれば、唄ひもする」の様に、同種の事柄を並列するにも用いるが、当期のものには殆ど現れない。たゞ小説の文ではあるが、次のがそれらしい。

◇正月着る物して貰ふ若旦那もあれば、盆帷子の心當ての手代もあり  
（傾城禁短氣、三巻第一）

尤も一見それらしく思われる例がないでもないが、仔細に考えるとそうでない。  
たとえば、

◇いや〜そちに〔櫻ヲ〕見せる人があれば、此方にもお眺めなさる、御方がある。〔枝ヲ〕折らす事はならぬ（元、一六九）

の「見せる人があれば……」は、「見せる人があるし……」と解される様ではあるが、實は「見せる人があると、そなたが言ふならば……」の意味である。即ち「ば」の並列の用い方は、当期では殆ど現れないと見てよからうと思う。

湯澤氏は、「ば」による並列用法が江戸期には殆ど行われていなかったであろうと述べている。たしかに、近世期に於いて、「ば」による並列用法の例は、それほど多くは採取できないのであり、その意味では、湯澤氏の言う通りであろう。なお、このことに関連して、湯澤氏は、引用文に於ける二つ目の用例は並列用法ではないと解釈されている。

(12) いや〜そちに〔櫻ヲ〕見せる人があれば、此方にもお眺めなさる、御方がある。〔枝ヲ〕折らす事はならぬ  
【湯澤氏の上記引用文の第2例】

「〔枝ヲ〕折らす事はならぬ」との文言からすると、湯澤氏の言うように、「そちに〔桜を〕見せる人があるし、こちらにもお眺めなさるお方がいる」のように並列的關係で捉えることは出来そうにないが、ここで注目したいのは、湯澤氏が当該箇所を「そなたが言ふならば……」と仮定条件として「言ふならば」という文言を補うか否かはさておき一解釈してい

る点にある。

湯澤氏の言うように、「見せる人があるし」のように、並列的關係—例えば「し」に拠る並列表現に置き換える—として解釈すると、その後の表現内容（＝折らす事はならぬ）との関わりから見て不自然である。とは言え、「ここを見せる人がいる」の「から」のように〈確定条件用法〉として解釈するのでもできそうにない。また、〈偶然条件用法〉として「そちらに見せる人がいると、こちらにも見る人がいる」のように解釈することも出来そうにない。ここは、「そちらに見せる人がいるのだったら、こちらにも眺める人がいる」のように、〈仮定条件用法〉と解釈することで、理解することが可能となろう。結果的には(12)は並列用法ではないということになるが、ここで注意したいのは、「已然形+ば」のこうした仮定条件用法のあり方である。

周知の如く、「已然形+ば」は古典語では確定条件としての用法であったが、それが現代語に見るように仮定条件を示す用法へと転じていくが、そうしたことが室町期から江戸期に顕著となった。

(13) ハテノおめへの孫でなけりやア、たしかどこのか孫であった

(東海道中膝栗毛 二編下)

先に、【タイプ②】—未実現の事態を列挙する用法—の発生の経緯については条件表現との関係に於いて、要検討事項であると述べたが、筆者は、この用法の発生の元にあったのは、上記の仮定条件用法であったのではないかと考えている。以下、この点について論ずる。

(14) ば「わしは子どもはおごんない 弥二「そんなら孫か ば」「インネ、子がなけりやア孫もおごんない

(東海道中膝栗毛 二編下)

(14)「子がなけりやア孫もおごんない」の箇所は「～が…、～も…」型で、いわゆる並列用法としての典型的な文型である「～も…、～も…」型ではないが、文脈からすれば、「子どももいないし、孫もいない」のような並列的關係として用いられていると見てよからう。まず、こうした「～が…、～も…」型にあって、並列的關係を示すものがあることに注意しておきたい。

(15) 人生には楽しい時があれば、辛い時もある。

(15)は、仮定条件として「人生において、楽しい時があると仮定すれば、その逆に辛い時もある」の意とも解釈されるが、「人生には楽しい時もあるし、辛い時もある」のように並列の意としても解釈することもできる。(14)(15)に関して、これらは接続助詞「し」による「PしQ」節で置き換えることができそうな用法でもあり、仮定条件としての意味でも解釈ができそうに思われる。【タイプ②】の発生の背景にあったのは、こうした仮定条件の用法であったのではないかと考えた。

(19)

条件表現「A (が) あれば、Bもある」型と並列表現「AもあればBもある」型との連続性については、『日本語文型辞典』(P487)に、「動物の好きな人がいれば嫌いな人もいる」のように初めの「も」に「が」が使われることもある。」という記述が参考になろう。たしかに「AもあればBもある」型と「AがあればBもある」型とは似通っているといえよう(= (16) 参照)。

(16) a 動物の好きな人がいれば、嫌いな人もいる。

b 動物の好きな人もいれば、嫌いな人もいる。

ここで、(7 a) を再掲する。

(7) a 盛場の小兒だとして、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうシ、寺地の者だとして、葬礼の強飯を食ふものもあらうシ、又食ふと限る事もねへネ (浮世風呂)

(7 a) 「鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらう(シ)」は、先の【タイプ②】であるが、ここでは「おびえぬもあれば、おびえる子もある」と、おびえない子とおびえる子の両者が併存することを述べており、それは話者による想定された事態である。この並列用法のベースにあるのは、

(18) 鳴物におびえぬ子があれば、おびえぬ子もあらう

のような仮定条件「Xがあれば、Yもある」形式(=「Xがあるのだったら、Yもある」)ではなからうか。仮定条件「XばY」において、前件の事態[X]は話者自身によって設定される。【タイプ②】は未実現の事態を並べるものであったが、そうした用法は「鳴物に怯えない子がいるのであったら、怯える子もいる」という仮定条件からの派生との関係を見ることで理解することができるのではなからうか。

## 6. 並列表現「～も…ば、～も…」の展開(1)

先に、「AもあればBもある」型を取る並列用法に二つのタイプがあると述べた。すなわち、眼前の事態あるいは経験に基づいた二つの事態を列挙するもの(=タイプ①)と、話者が想定するところの未実現の事態を列挙するもの(=タイプ②)とである。タイプ①は〈偶然確定条件用法〉をもとに、【タイプ②】は〈仮定条件用法〉をもとに行われるようになったものであろうと思われる。すなわち、【タイプ②】は、仮定条件の「A(が)あれば、Bもある」といった言い方を介して、「AもあればBもある」型の並列用法が発生したと見るわけである。

【タイプ①】は眼前の出来事や経験に基づく2つの出来事を描写するものであり、これは偶然確定条件からの派生、【タイプ②】は仮想的な事態を述べており、これは仮定条件から

の派生であろうと思われる。【タイプ②】の成立は、それまでの実現済みの事態の並列であったものから開放され、話者自身が併存すると考えるところの事態を述べることになったことを意味する。なお、この段階では、[P]が成立するのだったら、[Q]も成立するという意味であり、[P]が前件的な役割を果たしており、条件表現としての用法という性格を帯びているが、[P][Q]ともに話者が想定する事態を列挙するという言い方が為されることを契機として、(19)のように、ある条件のもとで成立すると話者が想定する事態を列挙することになったと思われる。

- (19) a なんでも商売に精出して見ねへ。親もにこ〜すれば、か、アも焼餅はやかずか、  
物前にも苦勞がうすくて、寿命が延るやうだ (浮世床)
- b 上方でも長崎でも、手めへに見かへる女もなければ、手めへの様な浮薄女もねへはな。(春告鳥 三篇)

## 7. 並列表現「～も…ば、～も…」の展開 (2)

さて、現代語の助詞「ば」の用法に関して、『日本語文型辞典』(「ば」の項)では、【9…も…ば…も】として、並列用法「～も…ば、～も…」について以下の記述がある<sup>(註3)</sup>。

- (1) 彼は心臓が悪いくせに、酒も飲めば、たばこも吸う。
- (2) 彼は器用な男で、料理もできれば、裁縫もできる。
- (3) 勲章なんかもらっても、うれしくもなければ、名誉だとも思わない。
- (4) 動物が好きな人もいれば、嫌いな人もいる。
- (5) 人の一生にはいい時もあれば、悪い時もある。

(1)～(3)のように類似したことがらを並列的に並べて強調する場合や、(4)(5)のように対照的なことがらを並べて、いろいろな場合があることを表す場合に使う。(後略)

上に示したように、並列用法「～も…ば、～も…」には「類似したことがらの列挙」と「対照的なことがらの列挙」とがあるとする。

- (20) a 彼は心臓が悪いくせに、酒も飲めば、たばこも吸う。  
b 彼は器用な男で、料理もできば、裁縫もできる。  
c 勲章なんかもらっても、うれしくもなければ、名誉だとも思わない。
- (21) a 動物が好きな人もいれば、嫌いな人もいる。  
b 人の一生にはいい時もあれば、悪い時もある。



「対照的なことがらの列挙（(21) / 引用箇所での用例（4）（5）」については、先述の如く、条件表現からの派生によるものであろうと考えられる。すなわち、「動物が好きな人がいるのであったら、嫌いな人もいる」、「人の一生にはいい時があるのだったら、悪い時もある」という言い方をベースにしたものであろうと思われる。

さて、(20) として掲げたもの一対照的なことがらの列挙ではなく、類似したことがらを列挙するもの一について、これを条件表現からの派生として捉えようとする、その連続性が見出し難いように思われる。まず、(20 a) を例にとると、まず、確定条件用法一（一般確定条件）一、例えば、「彼は酒を飲めば煙草を吸う（＝〈酒を飲むと、いつもそれに続いて煙草を吸う〉の意）」との関係を見るに、これはあくまでも継起的関係であり、並立的な意味合いは弱いように思われる。また、仮定条件として、「酒を飲むのだったら～」、偶然条件として、「酒を飲むと～」のような用法との関係も想定し難いであろう。また、(20 b) についても同様に、「料理ができる」ことと「裁縫ができる」こととの間に因果関係はなく、その基となった表現形式が考えにくいように思う（＝ (22) 参照）。

(22) \*彼は料理ができれば裁縫ができる。

このように、並列用法「PばQ」にあつて、その元にある条件表現形式が想定し難いものがあるが、それらに共通するのは、「PばQ」が、ある主題Xについて、何らかの性格付けを行う場合（＝ (23)）であるように思う。なお、(24) は主題となる「Xは」が明示されていないが、(24 a) は「勲章をもらうこと」、(24 b) では「この部屋」あるいは「この場所」に対する性格付けを施しているという意味で、(23) に準じるものと見てよいであろう。

(23) a 彼は語学に堪能で、ロシア語も話せれば中国語も話せる。

b このホテルのスイートルームには、ビールサーバーもあれば、ワインセラーもある。

c あそこの小料理屋は、料理も美味ければ、値段もお手頃だ。

(24) a 勲章をもらっても、嬉しくもなければ、名誉とも思わない。

b 暑くもなければ寒くもない。

(23 a) 「ロシア語が話せる」ことと「中国語が話せる」こととの間には因果関係はない。(23 b) ホテルの部屋に「ビールサーバーがある」ことと「ワインセラーがある」ことも同様に両者の間には因果関係はない。「料理が美味しい」ことと「値段が手頃である」こととの関係も同様であろう（＝ (23 c)）。「嬉しくはない」と「名誉と思わない」との関係（＝ (24 a) ）、「暑く（は）ない」と「寒く（は）ない」との関係（＝ (24 b) ）、いずれも条件表現との連続性は見出し難いものといえよう。

このように並列表現「PばQ型」にあつて、そのもととなる条件表現形式が想定しがたい

ものがあるが、これらは並列表現としての「～も…ば～も…」形式が出来上がった後に於いて行われるようになったものであろう。すなわち、並列用法「PばQ」形式の生成過程には、大きく二つの段階があったのではないと思われる。

① 条件表現としての用法から派生

② 並列表現「PばQ」形式からの用法拡張

①の段階は、条件表現からの派生であったが、そこから、「PばQ」が並列用法として確立することとなった。その段階で行われるようになったのが、先の「XはPばQ」という主題Xに対する性格付けを施す用法であったと思われる。この段階に至っては、従来の条件表現からの派生ではなく、並列表現としての「PばQ」からの拡張したものと捉えられる。

さて、「PばQ」による並列用法はこれまで見たように、並列されることの事態は二つであった。これは、当該表現形式が条件表現に由来することからすればある意味当然のことではあるが、現代語では、中俣尚己氏が示すように三つ以上の事態の列挙も行われるようになっていく(= (25))。こうした用法の存在は、中俣氏が言うように、「ば」が並列のマーカーとなっていることを示すものとなっている<sup>(註4)</sup>と見てよからう。

(25) a 例えばドラムであれば、シンバルもあればスネアもあればバスドラもある訳で。

(『日本語話し言葉コーパス』S 0 4 M 1 6 1 6)

b ただ、一方で、首相は18日、記者団にこう語った。「直球もあれば、フォークボールもあれば、カーブもある。持ち球、結構多いんだよ、私は」

(『朝日新聞』2002年1月21日朝刊)

こうした三項以上の列挙用法の発生は、条件表現からの派生ではなく、並列表現としての「～も…ば、～も…」形式が出来上がり、その上での用法拡張であると捉えられよう。なお、三項(以上)の列挙用法は明治期以降、行われるようになったようである(= (26))。

(26) 僕の書いたものは叙情的な処もあれば、小さい物語めいた処もあれば、考証らしい処もあった。  
(森島外「キタ・セクスアリス」)

## 8. 「ば」による並列用法の発生とその時期—条件表現の推移—

前節までに於いて、並列表現「～も…ば、～も…」の生成過程について考察を行った。こうした「～も…ば、～も…」による並列表現形式が近世後期頃から見られるようになったの何故かであるが、それには、条件表現「PばQ」が仮定条件表現化としての性格を強めていくことが関係しているのではないと思われる。

矢高正浩氏は、〈中世以前の条件表現と、近世以降のそれとを比較〉し、条件表現史の動

向について、〈かつて (= 中世以前…京注) の条件表現が、「前件の未確定・確定を活用形で表現し分け、以下に順当な内容を続ける」方法であったものが、近世以降は「接統辭が、後件に対するところの前件の関係のあり方を表現し分ける」方法にな〉り、それは〈前件で〔一般性〕を帯びた表現を行う、すなわち、「非特定時」を表す例を急激に増加させるということ〉になったと述べている。こうした条件表現のあり方の推移について、〈かつての条件表現の特徴は、話し手が実際に体験したり、あるいは実感を伴うような具体的なできごとに対応したものが多かったことに現れる。それに対して、「非特定時」のことがら、中でも実際のできごとの繰り返しなどではない、思考内で設定したことがらについて、因果関係を見出し、表現していく方法が、かつてと比べて増加するのである。いわゆる仮定条件・確定条件の別も、また事実的条件文(偶然確定)や原因理由文(必然確定)といった領域も越えて、条件表現の全領域に及んで、この方法による表現に重心をずらしていたのであった。〉とし、〈已然形+バによる「非特定時」の増加傾向は、大きく次の二つの事象も同時に引き起こすことを意味していた。〉と述べている<sup>(註5)</sup>。以下、(27)として引用する。

(27) (a) 已然形+バは、コンテキスト次第で原因理由文(必然確定)・仮定的条件文(恒常条件)のいずれとも解釈できる場合があった(例参照)。この表現は、具体的なできごとに対応した表現ではない、思考内で一般化して捉える表現が増加した言語環境においては、同一表現であっても仮定的条件文としての運用傾向を高める。結果、原因理由文であることを明示したければ専用形式を使用せざるを得なくなる傾向が強まることと相乗効果を起こしながら、次第に、已然形+バの内実が「已然」形から「仮定」形へと、スライドする。

(例)「雨降れば客なし」

…【具体的なできごとにもみる因果関係】中心の環境下では…

→ 「雨が降っているので客がいない」= 原因理由文

…【思考内で一般化した因果関係】多用の環境下では…

→ 「雨が降れば客がいないものだ」= 仮定的条件文

(b) 已然形+バが本来担っていた機能のうち、「已然」形をバが受けて、蓋然性の確定した事態を取るという意味合いが薄れることにより、もともとバの役割のうち、前件に対して順当に起こるはずと考えられることを後件に続ける機能のみが結果として浮上する。

矢島氏によれば、近世期に入ると、「PばQ」の用法において、〈従属節の独立性が失われた複文としての資格を消失した非条件的な用法〉が見られるとする。〈近世中期資料において、【従属的修飾用法】や【並列的用法】という複文としての自立性が不明瞭な用法が、本来の

用法領域から大きく伸張していくことが最も注目すべき変化であった)とし、「前置きの用法」や「並列的用法」の発生を指摘する<sup>(注6)</sup>。(28)に「前置き用法」の例を示す。

(28) a 見れば物ぐるはしき御有様。夜昼つみて成共外(そと)へ出して下さんすな。

(椀久末松山)

b 聞けば外に強い相手があつて、(略)患ひの療治をすると聞いた。

(けいせい浅間嶽)

このように、近世期以降、「已然形+バ」による条件表現は、次第に仮定的条件としての性格を強くしていく。先に、「PばQ」による並列用法「～も…ば、～も…」型の生成の一つに仮定的条件表現がそのベースにあったのではないかと述べた。【タイプ②】の成立を契機として、この表現形式はさらにその用法を拡張していることになった。並列表現「～も…ば～も…」が近世後期頃から見られるようになったのは上記の「PばQ」による条件表現が仮定条件へと転じていくことがその背景にあったと思われる。

## 9. おわりに

本稿では、並列表現「～も…ば、～も…」について、当該語法が江戸期に於いて成立を見たのはなぜか、また、それは条件表現としての用法とどのように関わるのかということ課題として、その生成過程を考察した。ここでは、そうしたことを考える為に、江戸期を主たる対象とせざるを得なかった。明治期以降の使用状況等、用法の展開の詳細については機会を改めて検討を行いたい。

### 【注】

(1) 中俣尚己氏『日本語並列表現の体系』(ひつじ書房・2015年2月)。

(2) 注1文献。

(3) グループ・ジャマシイ『日本語文型辞典』(くろしお出版・1998年2月)。

(4) 注1文献。

(5) 矢島正浩氏『上方・大阪語における条件表現の史的展開』(笠間書院・2013年3月)。

(6) 注5文献。

(きょう けんじ 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授)